

2025新春くらし

文化部 ☎ 075(241)6125 ✉ home@mb.kyoto-np.co.jp

5年以内になる病気 見える化



AIで予測された生活習慣病発症リスクの結果を見ながら健康指導を受けた男性。
数値を示されるとき、「リスクは大きかった」という
(京都市中京区・京都工場保健会) 撮影・安達雅文 ※画像の一部を加工しています

①予防医療時代へ手助け

「5年後に高血圧症になるリスクは56%」。団体職員の男性(66)は大津市では2年前、京都工場保健会(京都市中京区)で受診した間違った結果票にがくぜんとした。5年内に予測され、グラフ化されていたからだ。

毎日飲酒を欠かさず、運動もせず、メタボ体型。思い当たる節はたくさんあった。票には、生活習慣を改めるリスクが49%に減るとも書かれ、保健師から飲酒を控えるよう指導され、それが「それだけはできない」と導き出した助言という。男性は「毎年、同じような」と言ってしまった。

すると、酒をやめなても歩く距離を増やしたり、食事量を減らしたりして体重を減らせば、効果がある指導を受けた。

それでも、男性の生活習慣からA

Iが導き出した助言という。

男性は「毎年、同じような

急速に進歩し、世界中で普及が進む人工知能(AI)。2024年のノーベル化学賞と物理学賞をAI関連の研究者が受賞し、注目を集めている。私たちの暮らしにもなくてはならない存在になりつつある。京都や滋賀で、健康や衣食、教育など身近な生活に役立てるための活用や研究が進む現状を紹介する。

**AIと暮らす
京都・滋賀のいま**

健康診断ビッグデータから予測

同会は、人間ドックに加え、企業訪問する巡回健診で年間計約60万人の健康診断を行っている。このビッグデータを活用して、将来の疾病リスクを予測できるシステムを開発してきた。

同会は、2022年から人間ドックの受診者に、糖尿病や脂質異常など、生活習慣病となるリスクが100%に達する6項目に関して意識を高めてもらう狙いだ。

同会は、人間ドックに加え、企業訪問する巡回健診で年間計約60万人の健康診断を行っている。このビッグデータを活用して、結果を返すサービスを始めた。改善策や改善後のリスクも合わせて示すことで、予防に向けて意識を高めてもらう狙いだ。

同会は、AIサービスを始め、その後のデータを解析し、AIの精度や、健診結果や助言が利用者の生活改善につながる。今後は、AIサービスを始め、この数値で突きつけられるところが、数値で突きつけられるところが、「リスクだった」と明かす。改善すると決め、通勤時に2駅分歩き、食事量を減らした。1年もたたずで4キロ落ち、「うれしくて、体重を維持するために頑張っている」。

「あなたの5年後のAIリスク予測」。同会は、2022年

個人の健康データ蓄積アプリ普及 治療の質向上、発症前に予兆検知へ



毎日の健康データを蓄積できるアプリ「健康日記」。将来的には個人の生涯データを予防医療に役立てる仕組みを開発する構想もある(京都市左京区・ヘルステック研究所)

歩数計や心拍が測れる機能が付いたスマートウォッチや、近距離無線通信「ブルートゥース」機能付きの体重計や血圧計等のデータを蓄積する人が増えている。そんなデータを活用して、病気の発症予防に生かそうとする研究も進められている。

京都大と共同研究を行なうベンチャーフィルマーズ研究所(京都市左京区)は、アプリ「健康日記」を2020年に提供し始めた。現在約20万人がダウンロードしている。

同研究では、オムロンの血圧計や家庭で精密に測れるといふオムロンの血圧計。毎日の変化するデータを活用し、脳や心疾患の発症の予兆を検知するAIを開発中だ(向日市・オムロンヘルスケア)

高血圧などに起因する脳・心血管疾患が発症する予兆をAIが検知する仕組みを開発しようとして、21年から京大と共同研究を始めた。

厚生労働省によると、日本人の死因の2位は心疾患で3位は脳血管疾患(脳卒中)。要介護になる理由で最も多いのは脳卒中という。同社は「これらの予兆を捉えられれば、多くの人の命を救える」とする。

共同研究では、オムロンの血圧計や体組成計などを使って毎日計測している人の複数年にわたるデータを分析。高血圧の人や、実際に脳卒中を起こしたことのある人のデータも含まれている。

「医療機関でも使われている血圧計で毎日測る数値なので、データとして質が高い。精度が高い『AI検知』の開発が可能だと考えている」と自信を見せる。

AI検知が運用できれば、患者にとって発症を予防するための適切な生活習慣の改善方法を提案でき、医療従事者に生かすことができる。「医療従事者の負担軽減や、地域医療の格差解消に繋げていきたい」と話す。

AIの力を借りながら、暮らしの中の日々について役立つ」と見据える先は広い。

AIの力で効率的に健康管理できる未来は、すぐそこまで近づいていく。(藤松奈美)

—4回掲載予定です